

『歎異抄』のおはなし⑱第十三条(1) 善悪は宿業から生じる

今日から第十三条に入りますが、第十三条は『歎異抄』の中でも最も長いので、3回に分けてお話しします。

◎誤解を呼びやすい第十三条

今回は、善悪の宿業しゆくごうすなわち過去世の行いの問題と、「本願誇り」ぼこについてです。

「本願誇り」とは「造悪無碍」ぞうあくむげともいって、阿弥陀仏の慈悲にあまえて、悪いことをやり放題の人のことです。

ここではその「造悪無碍」の人のことをなげ歎くのかと思いきや、悪を怖れない「本願誇り」の人は往生できないと言っている人のことを逆にいまし戒めて、問題視します。

悪いことをやめて善いことをするようにつとめて、そこに救いを見出そうとするという異端に対しての批判です。

ですから「本願誇り」を批判する人への批判という、二重の否定がされています。

「本願誇り」が間違った信心であることを十分にわかった上で、「本願誇り」を批判する人をも批判するというのが、この条の大事な点です。

この第十三条は、しっかり読まないと、非常に誤解を呼びやすい条です。

◎『歎異抄』第三条「悪人正機」と第十三条との関わり

そしてこの第十三条は、『歎異抄』第三条の有名な「悪人正機」とも関わりが深いといわれます。

第三条の「悪人正機」とは、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という言葉です。

悪人でも救われるなら善人はなおさら救われるという一般常識を逆にして、〈善人でも救われるなら、まして悪人が救われないはずはない〉という主張が述べられ、これは『歎異抄』の中でもひときわ注目される思想です。

ここでいう善人とは、自分の力を頼りにして厳しい修行を積み、自力で善を修める人です。

悪人とは、煩惱をそなえた衆生のことで、自分の力では迷いを離れることができない人です。

阿弥陀仏の本願は、煩惱に苦しむ凡夫のためにあり、煩惱が深くて激しいと、しばしば悪行に走りがちになります。

しかしたとえ悪行を重ねることになっても、阿弥陀仏の本願はその人を見放すことはありません。むしろ、そうした「悪人」のためにこそ、誓願ははたらくのです。

そして善を行う・悪を行うというのは、私たちの意志の問題なのか、そして何が善で何が悪なのか。第十三条では、そうしたことが明らかにされていきます。

また、今日拝読する文章の中には、途中で親鸞聖人と唯円房との、ちょっと刺激的で面白い対話が出てきます。親鸞聖人が唯円房に、「人を千人殺してくれないか」と言うのです。これは『歎異抄』後半のハイライトともいえる場面だそうです。

◎ 「本願誇り」は往生できないのか？

「弥陀の本願不思議におはしませばとて、悪ををそれざるは、また本願ぼこりとて、往生かなふべからずといふこと、この条、本願をうたがふ、善悪の宿業しゆくごうをこころえざるなり。」

「本願ぼこり」とは、どんなに悪い人間でも救い取って見捨てないという阿弥陀仏の本願にあまえてつけあがり、恐れずに悪を行うことです。

「宿業」は、宿世（前世・過去世）からの業のことで、過去の世になした行いのことをいいます。

（現代語訳）

〈「阿弥陀仏の本願には、どのような悪人をも救ってくださる不可思議なはたらきがあるからといって、悪行を恐れぬのは「本願誇り」といって、こういう人は浄土に往生できない」という主張があります。このことは阿弥陀仏の本願を疑っているのであり、善悪はすべて過去の行い、すなわち宿業の結果であると心得ていないからなのです。〉

この最初の部分が、この第十三条の要かなめでもあります。

これは一見、常識にかなった主張のように思われますが、唯円房は、この主張が問題であるとするわけです。

これは「本願を疑う」ものであり、善悪の宿業を心得ないものであるといます。

私たちの行為の善悪は、宿業によるということを心得ていないというのが、この第十三条の大事な点です。

ですから悪いことをやめて善いことをする努力によって救われようとする人は、宿業を心得ない人であるというのが、唯円房の批判です。

◎善悪は、過去の行為によって起こる

「よきころのをこるも、^{しゆくぜん}宿善のもよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるるも、悪業のはからふゆへなり。」

「宿善」というのは、前世に積んだ善い行為のことです。

「もよほす」とは、うながすことです。

「おもはれせらるる」というのは、考えが浮かぶ、ということです。

「悪業」は、悪い宿業すなわち過去になした悪い行為のことです。

(現代語訳)

〈善い心が起こるのも、過去の善い行いがそうさせるからです。悪いことをしたいと思うのも、過去の悪い行いがはたらきかけるからです。〉

善悪は、宿業によるということが説かれています。

私たちは普通、よいことをしたり悪いことをしたりするのは、その時のその人の意志によると考えますが、過去の行為や過去世からの業すなわち宿業によって、よいことをしたり悪いことをしたりするというのです。

ですから人間は「宿業」によって善や悪を行っているのであり、自分の意志で善悪を選べるわけではないのです。

「故聖人のおほせには、^{うもうようもう}卵毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。」

「卯毛羊毛のさきにいるちり」というのは、^{うさぎ}兎の毛や羊の毛の先についている^{ちり}塵ということで、きわめて細かいことであることのたとえをいいます。

「つくるつみの、宿業にあらずといふことなし」とは、この世で造る罪で、過去の行為と無関係のものはない、という意味です。

(現代語訳)

〈今は亡き^{しんらんしょうにん}親鸞聖人は、「^{うさぎ}うさぎや羊の毛の先についた^{ちり}塵のような小さい罪であっても、過去の行い、宿業によらないものはないと知るべきである」と仰せになりました。〉

◎人を千人殺してくれないか？

「またあるとき、^{ゆいえんぼう}唯円房はわが^{いふ}いふことをば信ずるかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふらふとまうしさふらひしかば、さらばいはんこと、たがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つつしんで^{りょうじょう}領状まうしてさふらひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は^{いちじょう}一定すべしとおほせさふらひしとき、おほせにてはさふらへども、一人もこの身の^{きりょう}器量にては、ころしつべしともおぼへずさふらふと、まうしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞が^{いふ}いふことを、たがふまじきとはいふぞと。」

「あひだ」とは、…ので、…ゆえ、という意味です。

「さんさふらふ」は、さようでございます、はい、おっしゃる通り信じます、という意味です。

「いはんこと、たがふまじきか」というのは、今言ったことに間違いはないか、ということです。

「領状」は、領承、承知、承諾することです。

「たとへば」というのは、それではまず、まずもって、まずためしにいうが、といった意味です。

「ころしてんや」とは、殺してくれないか、という意味です。

「^{いちじょう}一定」は、確実なこと、しかときまったこと、間違いのないことです。

「器量」というのは、人にそなわった才能や力量のことです。

「ころしつべし」は、殺せるだろう、という意味です。

「さては…いふぞと」というのは、それではどうして私のいうことに背かないといふのか、という意味です。

(現代語訳)

くまたあるとき聖人が、「唯円房よ、あなたはわたしのいうことを信じるか」と仰せになりました。そこで、「はい、もちろん信じます」とお答えしますと、「それでは、わたしがいうことに背かないか」と、重ねて仰せになったので、「つつしんでその通りにいたします」と申しました。すると聖人は、「ではまず、人を千人殺してくれないか。そうすれば、浄土往生は間違いないだろう」と仰せになったのです。そこで「聖人の仰せではありますが、わたしのような器量のものには、一人たりとも殺すことなどできるとは思えません」と申しあげたところ、聖人は「それでは、どうして「この親鸞のいうことに決して背かない」などと言ったのか」と仰せになりました。>

ここに「唯円房」という人名が出てきますが、『歎異抄』の中で「唯円房」という名前が出てくるのは、第九条に続いてこれで二回目です。

第九条では、「念仏を申してもちっとも嬉しくないし浄土に急いで参りたい心が起こらないのはどうしてでしょうか」という疑問を親鸞聖人に投げかける唯円房に対して、聖人は「**親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり**」と、「唯円房よ、おまえも同じ心だったか」と答えています。

そしてここから、諸説ある『歎異抄』の著者の問題の答えが唯円房であるということが推察されるわけです。

『歎異抄』の作者は、唯円房のほかに、覚如上人説、如信上人説などがあります。

覚如上人は親鸞聖人の曾孫で本願寺第三世、如信上人は親鸞聖人の孫で本願寺第二世です。

『歎異抄』文中の二か所に「唯円房」という名前が出てくるため、現在では唯円房が書いたとされる説が有力です。

この対話の部分だけをいきなり読むと、かなりショッキングな内容に驚かれる人もいることと思いますが、これはもちろん「たとえ話」です。

また「ころしてんや」という言葉に、関西弁の名残なごりが見られるのだそうです。

関東におよそ20年ほど滞在して布教しておられたといわれる親鸞聖人ですが、京都で生まれ育ったので京都弁が残っておられて、これは親鸞聖人の生の声を聞くような言葉です。

そしてこの「千人殺してくれないか」というのは、仏教説話の「アングリマーラ」(央掘摩羅おうくつまら)という極悪人の話が元になっているともいわれます。

お釈迦様の時代に、バラモン僧のアングリマーラは、「人を1000人殺したら天上界に生まれる」と師から言われて、999人の指を次々に切って首飾り(髪飾りという説も)にしていました。1000人

目にお釈迦様に出会った時にお釈迦様を殺そうとしますがうまくいかず、逆に教化されて回心し、出家して自分が悪事をはたらいた村で人々に施しを乞いますが次々に断られ、最後にはついに施しを受けることができ最高の悟りを得たそうです。

親鸞聖人が、「千人殺してくれないか」と言ったのは、このアングリマーラの話を読んでいたのかもしれません。

◎業縁がなければ殺せない

「これにてしるべし、なにごとも、こころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなわちころすべし。しかれども一人にてもかなひぬべき業縁ごうえんなきによりて害せざるなり。」

「こころにまかせたる」というのは、自分の思い通りにする、とか、思いのままになることです。

「すなわち」は、ここでは即座に、ただちに、すぐに、という意味です。

「かなひぬべき」とは、できそうな、とか、思うようになる、という意味です。

「業縁」は、過去の行いが原因となって現在の結果が生ずることで、宿業の縁のことをいいます。これは行為を引き起こす間接的原因のことで、「縁」は「因縁」の「縁」であり、「因縁」の「因」は直接的原因をさします。

（現代語訳）

〈続けて聖人は、「これでわかるであろう。どんなことでも自分の思いのままに実行できるのなら、浄土往生のために千人殺せと言われたら、すぐにでも殺せるはずだ。けれども、一人たりとも思い通りに殺せる業縁がないので、殺さないだけなのである。〉

「縁にふれたら、何をするかわからない」というのが私たちです。

悪いことをしなかったのは、自分が善人だからではなく、そういう悪い縁にふれずにすんでいただけなのです。

◎自分の心が善いから殺さないのではない

「わがこころのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあ

るべしと、おほせのさふらひしは、われらがこころのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて願の不思議にてたすけたまふといふことを、しらざることをおほせのさふらひしなり。」

「わがこころのよくて」というのは、自分のこころが善であるから、という意味です。

「よきをばよしとおもひ…あしとおもひて」というのは、善ければ往生できると思ひ、悪いと往生できないと、自分の心の善悪によって往生の可否が決まると考えることです。

(現代語訳)

〈「自分の心が善いから殺さないのではない。また、人を殺すつもりがなくても業縁がはたらけば、百人でも千人でも殺すこともあるだろう」と、聖人は仰せになったのです。これはわたしたちが、自分の心が善いのは往生のためによいことであり、自分の心が悪ければ往生のためには悪いと勝手に思い、善悪にとらわれて、阿弥陀仏の誓願の不可思議なはたらきによってお救いいただくということを知らないでいると、仰せになったのです。〉

◎殺し合いが続いた平安末期

「害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべし」というのは、親鸞聖人が生きた時代背景も関係あるかもしれません。

親鸞聖人が幼い頃には^{もちひとおう}以仁王の乱(1180年)が起こって争乱の中にあり、^{さつりく}殺戮が日々続きました。以仁王が反平氏の企てに失敗して殺された結果、親鸞聖人の日野家の叔父も影響を受けて、幼い聖人や兄弟も皆仏門に入ることになったのではないかといわれます。

親鸞聖人は、1181年に数え9歳で、京都の青蓮院で出家しています。

そしてこれは源平争乱の時代に向かった頃で、平家滅亡(1185年)によって争いに決着がつきますが、親鸞聖人も、もしかすると人が人を殺す様子を目にすることがあったかもしれません。

殺し合いの中で、平和な時であれば決して起こらないような悪行を犯す、というのが当時の現実だったことでしょう。

このような乱世の末法の時代に生まれ、悪行を犯さざるを得なかったのは、その人の宿業のなせる業だといえるのかもしれません。

◎悪人とはこの私であり、すべてを弥陀にゆだねてこそ救われる

私たちが、自分の心がよいから往生できる、心が悪ければ往生できないと思うのは、私たちの自力

のはからいです。

そうした自分の考えにとらわれて、阿弥陀仏の本願の大いなるはたらきによって救われるということを知らないでいることを、ここではお諭^{きと}くださっているのです。

『歎異抄』第三条で「悪人」が強調されているのは、「実は私こそが悪人である」ということを教えるためです。

親鸞聖人は、人間はみな本質的に悪であるという認識を抱いておられました。

聖人の言葉は、自分自身の心を深く見つめることによって見えてくる、罪悪や煩惱に根差したものです。

◎宗教的な「悪」の認識がないと弥陀の本願を受け入れられない

ほとんどの人は、自分は悪人ではないと思っています。

親鸞聖人の言う悪人とは、「自らの力では迷いを離れることができない人」のことであり、世間一般の常識でいう「悪いこと」をする人ではありません。

宗教的、仏教的な「悪」です。

自分中心的な考えに執着し、そこから抜け出せない、煩惱まみれのこの私のことです。

そういう認識に至ることができて初めて、「阿弥陀仏の本願」というお救いを納得することができるのです。

そうでない限り、「悪人こそ救われる」と言われても、普通の倫理道徳や常識にとらわれていては、とても受け入れられるものではありません。

◎宗教的な善悪と、悪人とは

宗教的な善悪では、自分こそが「悪人」であり、「煩惱具足のわれら」であり、さらに「宿業的存在」であるということです。

それを認識できない限り、本願念仏による救済を納得することは難しいのです。

そして善も悪も、すべて宿業・業縁の結果であり、すべてを阿弥陀仏の本願他力にゆだねてこそ、救われるのです。

今日はこのあたりにしたいと思います。

次回は今日の続きを、7月13日のお盆法要でお話したいと思います。

次回も善悪の問題が出てきます。

ご清聴ありがとうございました。